

ニーチエとイエス

——『ツァラトゥストラ』研究のための覚え書——

ニーチエの主著『ツァラトゥストラ』^①にはバイブルを連想させる数多くの箇所がある。しかし、バイブルに記された神と人の歴史においてその頂点を形成するイエスその人の名を挙げ、その生と死、その思想に言及する箇所はただ一つしかない。その箇所で、ニーチエは、みずからの思想の表明を託す登場人物ツァラトゥストラに、次のように語らせている。

「まことに、ゆるやかな死の説教者たちが尊敬するあのヘブライ人は、あまりにも早く死んだ。……あのヘブライ人イエスは、まだ、ヘブライ人の涙と憂愁しか知らなかった。また、善にして義なる者たちの憎しみしか知らなかった。そこで死への憧れが彼をおそつたのだ。彼が荒野にとどまり、善にして義なる者たちから遠ざかっていたらよかつたのに！ おそらく彼は生きることを学び、大地を愛することを学んだろうに——さらに加えて笑うことをも！ 私の言うことを信じるがいい、私の兄弟たちよ！ 彼はあまりにも早く死んだのだ。もし彼が私の年齢にまで達していたなら、彼はみずからその教えを撤回したことであろうに！ そういう撤回をなしうるほ

どに高貴な人間で、彼はあつたのだ！ だが彼はまだ未熟であつた。青年というものは、未熟なまま愛し、また同様に未熟なまま人間と大地を憎む」^②。

『ルカによる福音書』に、「イエスが宣教を始められたときはおよそ三〇歳であつた」^③と記されている。イエスはその後数年、少なくとも二年以上公に宣教活動をおこなつた後、処刑された。ニーチエは、そのイエスを、「あまりにも早く死んだ」、憎むにせよ愛するにせよまだ「未熟」なまま「青年」として死んだとツァラトゥストラに語らせている。そして、そのように語る登場人物ツァラトゥストラ自身は、今、四〇歳を越えている。『ツァラトゥストラ』の冒頭部分を見てみよう。

「ツァラトゥストラは、三〇歳になつたとき、その故郷と故郷の湖を捨てて山に入った。そこで彼は、みずからの精神と孤独を楽しみ、一〇年のあいだ倦むことを知らなかった。しかしついに彼の心が変わるときが来た。——ある朝、ツァラトゥストラは曙の光とともに起き、太陽を迎えて立ち、次のように太陽に語りかけた。『偉

北岡 崇

大なる天体であるあなたよ！もしあなたが、その光を浴びせる者たちをもたないなら、あなたの幸福とは何であろう！……見てください！あまりにもたくさん蜜を集めた蜜蜂のように、私は私の貯えた知恵がわずらわしくなってきた。知恵を求めてさしのべられる手が、私には必要になった。私は贈りたい、分配したい。……そのために私は低地において行かなければならない。あなたが夕方、海の背後に沈み行き、さらにその下の世界に光明をもたらすときのように。あふれるほど豊かな天体であるあなたよ！……」。

イエスが宣教活動を始めた年齢の頃「山」に入ったツァラトウストラが、今、下山を決意したところである。彼は、「一〇年」におよぶ山上での孤独な生活の中で貯えた知恵を人間たちに贈り与えようとしている。彼はこうして、世界に「光明」をもたらす太陽が知るような「幸福」をみずから獲得したいと思っているのである。ところで、ツァラトウストラが貯えた知恵、人間たちに贈り与えたいと願う知恵とは、一言で語るなら、他でもない「超人」の思想である。ツァラトウストラは、「大地の意義」の実現、すなわち「超人」の誕生に向けて、彼みずから移りゆき、自己克服するとともに、そのような移りゆきと自己克服を人間たちにも勧めるのである。それゆえ、彼の知恵の核心には、大地への愛、この世界への愛、さらには大地ないし世界の意義の実現を希望する人間たちへの愛がある。この愛は、たとえば、「私が愛するのは、おのれの没落し、犠牲となる理由を、すぐに星々の背後に求めることをせず、いつか大地が超人のものとなるようにとその身を大地にささげる人々たちである」という言葉にその表現を見る愛である。このような愛と不可分なツァラトウストラの知恵は、イエスの知恵とは異なる。「マタイによる福音書」によれば、「律法の中で、どの掟がもっとも重要でしよ

うか」と尋ねるファリサイ人に、イエスは次のように答えている。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』。これがもっとも重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい』。律法全体と預言者は、この二つの掟にもとづいている」と。律法と預言者の意味を神への愛と隣人への愛に集約するイエスの知恵が、「神は死んだ」と語るツァラトウストラの知恵と一致しないことは言うまでもない。万物を創造する神、すなわち「主はすべての国を超えて高くいまし、主の栄光は天を超えて輝く。私たちの神、主に並ぶものがあるうか。主は御座を高く置き、なお、低く下って天と地を御覧になる」と讚美される神——天地を超越するこの神への愛を「もっとも重要な第一の掟」と説き、この神への愛をその生の全体をあげ死に至るまで証したイエスの知恵が、「その身を大地にささげる」ようにと人間たちに勧めるツァラトウストラの知恵と一致しないことは明らかである。その相違について、ツァラトウストラは、次のように語っている。「私はあなたがたに切願する、私の兄弟たちよ、大地に忠実であれ、と。そして、あなたがたに地上を超えたもろもろの希望を説く者たちに信用を置くな、と。……かつては神を冒瀆することが最大の冒瀆であった。しかし、神は死んだ。それゆえ、これら神を冒瀆する者たちも死んだ。今や、もっとも恐るべきことは、大地を冒瀆することだ」。

先に引用した箇所、ツァラトウストラは、みずからの知恵とイエスの知恵の相違を、イエスの「未熟」と自分自身の成熟の差として捉えていた。イエスは「あまりにも早く死んだ」とか、「へブライ人の涙と憂愁」しか知らない彼は「死への懂れ」におそわれたとか、「未熟」なまま「人間と大地を憎み」、「生きること」、「大地

を愛すること」、「笑うこと」を学ぶことができなかったとか、語っていた。「アンチクリスト」を自称するニーチェが、イエスに対する優越意識を、ツァラトゥストラを通してはつきりと表明している箇所である。だが、イエスに対するニーチェの優越意識は、はたして正当なものであろうか？——この問題を十分に問うためには、バイブルに記されたイエスに触れないわけにはゆかない。それゆえ、まず、ツァラトゥストラによるイエス批評の内容を、バイブルの記述とつき合わせて検討してみたいと思う。

※

※

バイブルの中に、イエスについて彼は「あまりにも早く死んだ」とか「死への憧れ」におそわれたとか「未熟」なまま「人間と大地」を憎んだとか語ることを正当化する記述を見いだすことは不可能である。バイブルは、むしろ逆に、イエスを、身体をもってこの大地に生きる人間への成熟した模範的な愛を実践した人として、また神と人間への愛のゆえに死を甘んじて受け入れた人として記している。

『ヨハネによる福音書』の中に、イエスがみずからの生の意味について、群衆に語り聴かせる箇所がある。

「私が天から降^{くだ}って来たのは、自分の意志をおこなうためではなく、私をお遣わしになった方の御心をおこなうためである。私をお遣わしになった方の御心とは、私に与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。私の父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、私がその人を終わりの日に復活させることだからである」。

バイブルにおいて、イエスは、神の「御心」——すなわち、この

地上でのイエスの生と死、さらに死からの復活を目撃し、あるいはその目撃者の証言を聴き入れ、イエスを「世の罪を取り除く神の小羊」であると信じその足跡にならおうとする人間たちに「永遠の命」を与えようとする意志——を実現するために、「天」から派遣された「神の子」として記されている。そのイエスを、身体をもってこの大地に生きる人間への成熟した模範的な愛を実践した人であるとなぜ言えるのか、この点を明らかにするため、バイブルが人間の命の源について何を語っているか、また、人間の命はバイブルが記す神と人間の歴史の相のもとでどのように理解されているか、見てみよう。

バイブルによれば、命の源は神にある。ダビデが神に語りかける詩の中に、「命の泉はあなたにあり……」という一節がある。また、別の詩でダビデは次のように語っている。「御顔を隠されれば彼らは恐れ、息吹を取り上げられれば彼らは息絶え、もとの塵に返る。あなたは御自分の息を送って彼らを創造し、地の面を新たにされる」⁽²⁸⁾。さらに、『創世記』に、「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」と記されているように、人間に命を与えるのは神であり、それゆえ、命とは神からの賜物である。神から独立のそれ自体において不死なる魂が物体と結合して人間およびこの地上で身体をもって生きる他の生物にその命を与えているとする思想とか、死を、不滅なる「魂の、身体からの解放と分離」と解する思想⁽²⁹⁾とかは、バイブルとは無縁である。しかしまた、人間から命を奪うのも神である。神は殺しまた生かす力と権限を所有している。したがって、自然死という言葉で、神の意志とはかわりなくおのずと訪れる死という事態が理解されるなら、バイブルには元来、自然死

という概念は存在しない³⁶。たしかに、『詩篇』におさめられた「神の人モーセの詩」に、「人生の年月は七〇年ほどのものです。健やかな人が八〇年を数えても得るところは労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、私たちは飛び去ります」とある。だが、人間の寿命を七、八〇年と語るこの言葉も、人間にとつて死が、神の意志とはかわりなくおのずと訪れるという意味で自然な出来事であることを示す言葉ではない。バイブルによれば、人間の死は、自然な出来事ではなく、神の掟に背くことに対する神からの処罰である。

『創世記』二一章および三章の記述を見よう。神は、みずから創造した最初の人間アダムを「エデンの園」に置き、彼に「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」と述べている。このとき神は、アダムに一つの掟を与えたのである。ところが、アダムとその妻は、「蛇」すなわち「悪魔」ないし「サタン」の誘惑⁴¹にきつかけを得て「善悪の知識の木」の「実」⁴²を食べる。神はアダムとその妻に命の賜物を与えつつけることをやめ、二人を予告どうり死に定めた、と記されている⁴³。

こうして、一方で、予告どうり事を運ぶ⁴⁴という意味での神の力と義が証されるとともに、他方では、自分たちを死の支配下に売りわたすという代償を支払って、神の掟に服従することなしにみずから「神のように」⁴⁵善悪を判断しつつ生きるというアダムとその妻エバの生活が始まる。すなわち、彼らは、「永遠の命」を支える「命の木」の育つ園から追放され、「呪われた」地、すなわち「茨とあざみ」の茂る荒地を「顔に汗を流して」「耕し」、より好ましい状況が何であるかを見ずから判断しつつその状況をつくりあげてゆくという活動、すなわち文化を創造する活動にたずさわるのである。しかし、

アダムとエバの墮罪は、彼らのみにかかわる事柄ではない。アダムとエバの子孫である人間はすべて、罪人である彼らに型どられ、罪への傾きをもったものとして、あるいは罪におちいらざるをえないという弱みをもったものとして、それゆえまた死を免れることのできないものとして生まれることになるからである。つまり、アダムとエバは、その罪によって彼ら自身だけでなく彼らの子孫である全人類をも死の支配下に売りわたしたというのがバイブルの思想である。パウロは、アダムを念頭に置いて、述べている……。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人におよんだのです。すべての人が罪を犯したからです」。そして、アダムの子孫もまた、アダムと同様、みずから「神のように」善悪を判断しつつ、⁵⁰国家、法律、社会、倫理、慣習、道徳、あるいはさらに宗教、科学、芸術、等々を形成するのであるが、死の支配下にある人間が独力で形成するかぎりでのこれら文化的産物もすべてそれを創造する人間同様、死の支配下にあり、崩壊を免れることはできない。すなわち、アダムより生まれる人間はすべて生まれながらにして死刑囚になるよう定められているのであり、そのような人間が織り上げてきた歴史は、それを織り上げる当の人間の目にこそ、様々な善と善、正義と正義がぶつかり合い互いに他を否定したり他と妥協したりする錯綜した流れと見られることがあるにせよ、神の目には、根本においては悪に悪をぬり重ねてゆく歴史、くり返される罪の歴史、換言すれば悪人の歴史、罪人の歴史なのである。⁵¹

しかし、特定の文明、政体、社会、慣習や、特定の様式をもつ科学、芸術、等だけでなく、それら多種多様な文化的産物のひしめき合う場である罪人の歴史も、バイブルによれば、その全体がいずれ

は終わる。それも、神の意志とはかかわりなく進行するという意味での自然のプロセス、宇宙の生成消滅のプロセスに人類全体の死滅がくり込まれているということによってではなく、また人間が神への服従を介さず独力で、何かある一定の形式のもとに永続する文化を樹立することに成功するからでもなく、また人間がみずからつくりあげた文化的産物を用いて人類全体を死滅させるということによるのではない。それは、罪人を死に定める義なる神のその義が、裁きの行為には還元されえぬほど広大なものであり、また義なる神は同時に人間を愛する神であり全能の神でもあるということによるのである。

アダムとその妻を創造し、彼らを「見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木」や「永遠の命」を保証する「命の木」の育つ園に置いた神は、彼らに「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」と命ずるように、元来、人間が神の掟に服従しつつ、こうしてまた神に祝福されつつみずから一つの民へと形成し、浄福の地においてその地の永遠に幸福な支配者として生活し、さらに、当初は囲い地(園)にすぎない浄福の地を全地に拡大してゆくことを意図していたものと思われる。いずれにせよ、バイブルは、浄福の地から追放された人間が織り上げてゆく歴史を、同時に、神が右のような意図の実現に向けて人類を導く歴史、すなわち神による人間の救済の歴史として捉えている。つまり、歴史とは、一面、罪人の歴史であるとともに、他面では、神が、人間にその罪から離れ神にたち返り神の祝福を得るようにと呼びかけ、その呼びかけに応じようとすると人間たちを集めてゆくたゆまぬ救済の歴史でもある。人間を罪とその報いとしての死から救済する神の力に対する確信は、た

とえば『詩篇』の次の言葉に表明されている。

「人間は栄華のうちにとどまることはできない。屠られる獣に等しい。これが自分の力に頼る者の道、自分の口の言葉に満足する者の行く末。陰府に置かれた羊の群れ、死が彼らを飼う。……しかし、神は私の魂を贖い、陰府の手から取り上げてくださった」。

「イスラエルよ、主を待ち望め。慈しみは主のもとに、豊かな贖いも主のもとに。主は、イスラエルを、すべての罪から贖ってくださる」。

全能の神が存在し、その神が意志するなら、その神が人間を復活させたり、人間の死を消滅させ人間に「永遠の命」を与えたり、人間を祝福して人間が幸福に生きることを可能にしたりできないはずがない。とはいえ、神による人間の救済、人間に対する神の愛の表現は、神の義と矛盾する仕方ではなされることはない。罪人の罪を赦し罪人を死の支配下から浄福の地における「永遠の命」へと解放するにしても、それは公正な手続きを介してである。だが、人間の死とは元来、人間の罪に対する義なる神からの処罰として生じたものであった。では、罪の赦しはいかにして可能か？

イザヤが次のように語る箇所がある。「主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえないのではない。むしろお前たちの悪が神とお前たちとのあいだを隔て、お前たちの罪が神の御顔を隠させ、お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ」。つまり、イザヤによれば、神が人間を救済しないのは、神が無力であるからではなく、また神が人間を愛さないからでもない。むしろ、人間が神にたち返り神の導きを受け入れようとしないからである。いや、さらに根本的に語るなら、神から独立することをやめ神にたち返り、神を愛し神の掟を守るといふこのことが、アダムから生まれた人間

にとつては、その力を越えた業であるからだ。それゆえ、人間の罪が赦されるためには、神が人間を拒まないというだけでは十分ではない。人間は、その罪と死から免れるために「清い心」をもたなければならぬが、人間は独力ではその「清い心」をもつことができない。ダビデが次のように祈るのもそのためである。「私の罪に御顔を向けず、咎をことごとくぬぐってください。神よ私のうちに清い心を創造し、新しく確かな霊を授けてください。御前から私をしりぞけず、あなたの聖なる霊を取り上げないでください。御救いの喜びをふたたび私に味わわせ自由の霊によって支えてください。」

さらにまた、人間は、独力では神のもとに「たち返る」こともできない。エレミヤの『哀歌』に次の一節がある。「主よ、御もとにたち返らせてください。私たちはたち返りません」。

だが神は、まさしくそのような人間に対して、たとえばイザヤの口を通して救済を約束する。神は「死を永久に滅ぼしてください。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい、御自分の民の恥を地上からぬぐい去ってください。これは主が語られたことである」と。

すでに十分明らかになったように、神の義は、もはや裁きの行爲には還元されえない。人間にその救済を約束する神は、人間をその罪に対する報いとして死に定めるということだけでみずからの義を十分に立証したことはないからである。神は、みずからの義を実現しなければならぬ。それゆえ、神の義の立証とは人間に対する神の愛とその神の力の立証に他ならないということになる。だが、それにしても、この神の愛は、罪に対する報いは死であるとするかぎりでの神の義と矛盾しないであろうか？——裁きに際しても完全に、人間に対する愛においても完全である神、この神の栄光

は人間に対してどのようなようにして表現されるのであるか？——あるいは同じことであるが、人間の救済はどのようなようにして実現されるのであろうか？——

バイブルによれば、人間をその罪と死の支配下にあるという状態とから浄福の地における「永遠の命」へと解放するためには、「永遠の命」を享受する資格のある人間すなわち罪のない人間が罪人の身代わりとして死を受け入れるということが必要である。そのような罪のない人間の到来を、『イザヤ書』が予告している……。

「乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように、この人は主の前に育った。見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。……彼が担ったのは私たちの病、彼が負ったのは私たちの痛みであったのに、私たちは思っていた、神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのは私たちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは私たちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、私たちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、私たちはいやされた。私たちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。その私たちの罪をすべて主は彼に負わせられた。……彼は不法を働かず、その口に偽りもなかったのに、その墓は神に逆らう者とともにされ、富める者とともに葬られた。病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼はみずからを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永くつづくのを見る。主の望まれることは、彼の手によって成し遂げられる。彼はみずからの苦しみの実りを見、それを知って満足する。私の僕は、多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪をみずから負った。……多くの人の過ちを担い背いた者のための執りなしをしたのはこ

の人であった」。

バイブルは、イエスの生と死を、右の予言の成就として捉えている。つまり、イエスは、アダムの子孫である人間をその罪と罪に対する報いとしての死から解放するために、「きずや汚れない小羊」のような人間としてその命を神にささげたと言っているのである。バイブルによれば、たしかに、イエスの母マリアはアダムの子孫として「きずや汚れ」を免れてはいないが、その「きずや汚れ」はその子イエスには受け継がれない。人間イエスは、神が人間を救済するために地上に派遣した「神の子」であり、その派遣にあたりアダムに由来する「きずや汚れ」が受け継がれないよう「聖霊」が働いたというのがバイブルの思想である。このようにして神は、その義と人間に對するその愛を、自分の子を人間イエスとして地上に派遣することにおいて表現し、人間イエスは、父なる神にならつて人間を愛し、多くの人間が神のもとにたち返り神に祝福された「永遠の命」を享受できるようにと罪なくして処刑されることにおいて、父なる神から託された地上での職務を完全に遂行し、その生の全体をあげ神の栄光を表現したと言っているのである。

しかも、神に祝福された「永遠の命」ということで、まさしくこの地上での命のことが考えあわされている。この点を明らかにするため、まず『詩篇』から、次いで『箴言』から引用しよう。「悪事を謀る者は断たれ、主に望みを置く人は、地を継ぐ。……貧しい人は地を継ぎ、豊かな平和にみずからをゆだねるであらう」。「正しい人は地に住まいを得、無垢な人はそこに永らえる。神に逆らう者は地から断たれ、欺く者はそこから引き抜かれる」。――さらに、『マタイ』による福音書によれば、イエスは群衆に、「御国が来ますように。御心がおこなわれますように、天におけるように地の上にも」

と祈るよう教えるが、この祈りも、この大地、人間が身体をもつて生活するこの世界が「この世の支配者」、すなわち「この世の神」である「悪魔」の支配下より解放され神に祝福された淨福の地となることを祈願するものである。――そして、『ヨハネの黙示録』において、神の祝福を得た大地に言及されている。「私はまた、新しい天と新しい地を見た。……神が人とともに住み、人は神の民となる。神はみずから人とともにいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである」。

バイブルはイエスを、その生の全体をあげて神への愛とこの愛を媒介にした人間への愛を証した人として記している。身体をもつてこの大地に生きる人間への模範的な愛を実践したイエスについて、彼は「未熟」なまま「人間と大地」を憎んだとツァラトゥストラが語っていた。しかし元来、バイブルには、それを構成する書物全体を通して、人間および人間が生活する場である大地の意義を全面的に否定するという思想は存在しない。創造されたばかりの世界は「極めて良い」ものであったし、「サタン」およびアダムとその妻を介してこの世界に入った悪もいずれば消滅する一時的なものであるというのが、「人間と大地」に関するバイブルの基本的な理解であり、神と人の歴史においてその頂点を形成するイエスの理解でもあった。ツァラトゥストラは人間たちに、「ふさわしいときに死ぬ」と教える。だが、バイブルの記すイエスこそ、「未熟」なままではなく、神から課せられた使命を完全に遂行しつつ、「遅すぎ」も「早すぎ」もせず「ふさわしいときに」、「勝利に輝き」、しかも生き残る者に「棘」の痛みを与えるような死を死んだのではなからうか。つまり、ツァラトゥストラが「最善」と語る「完成をもたらす死」、「自由な死」

を……。

ツアラトウストラはまた、「ヘブライ人の涙と憂愁」しか知らなかったイエスは「死への憧れ」におそわれたと語っていた。だが、この批評も文字ど通りの意味においては、バイブルに記されたイエスには適合しない。イエスは、死を憧れてはいない。バイブルによれば、死は、イエスにとつてもやはり「苦い杯」であった。『マタイによる福音書』の中に、間近に迫ったみずからの死を意識するイエスが神に向かって次のように祈る箇所がある。「父よ、できることなら、この杯を私から過ぎ去らせてください。しかし、私の願いどおりではなく、御心のままに」。また、この祈りに先立ち、イエスは三人の弟子に「私は死ぬばかりに悲しい」と語っている。イエスは、死を憧れてはいない。むしろ自分から遠ざけたいと思うその死という「杯」を、それでも彼が受け入れようとして祈る言葉、「父よ、私が飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心がおこなわれますように」という言葉より明らかかなように、イエスは、死を憧れたのではなく、死を目標としたのではなく、「涙と憂愁」に満ちたこの大地、この世界から見切りをつけ、この大地、この世界を見捨て、この大地、この世界からのがれたいと願ったのでもない。イエスは、神の「御心」をおこない神の栄光を現わすこと、神の義と人間に対する神の愛をその身において表現すること、こうして神を讃えることを意欲するがゆえに、死を受け入れようとしているのである。「超人」の誕生を希望する人々が学ぶべき愛についてツアラトウストラが語る次の言葉は、バイブルに記されたイエスを想起するとき、一層よく理解できるものとなる。「いつか、あなたがたはあなたがたを超えて愛さなければならぬ。だから、まず愛することを学びなさい。そしてそのために、あなたが

たはあなたがたの愛の苦い杯を飲まなければならない。最善の愛の杯の中にも、苦味がある」。

※

※

ツアラトウストラによるイエス批評の内容は、文字ど通りの意味においては、イエスに関するバイブルの記述によって反駁されるということが明らかになった。まず、この点を押さえておこう。そして、『ツアラトウストラ』を読み進めるとき、むしろわれわれは、ツアラトウストラが批評するイエスには、かつて山上に登った際のツアラトウストラ自身の姿が投影されていることに気づくのである。「一〇年」におよぶ山上での孤独な生活の後、山をおりるツアラトウストラが出会った「老人」は、次のように語る。

「この旅人には見覚えがある。何年も前に、この人はここを通過して行った。この人は、ツアラトウストラという名前であった。だが、この人は変わった。あのとき、あなたはあなたの灰を山に運んで行った。今日は、あなたはあなたの火を谷に運ぼうとするのか？ ……この人の目は清らかで、その口もとはは嫌悪の念はひそんでいない。この人は舞踏者のように軽やかに歩いて来るではないか？ ツアラトウストラは変わった」。

三〇歳で山に入ったとき、ツアラトウストラは、彼自身の生の燃えかすである「灰」をたずさえ、その口もとはは「嫌悪の念」を浮かべていたと言う。今よみがえって燃える「火」を谷に運ぶツアラトウストラは、かつての自己を回想しつつ、その自己を、若くして死んだイエスに投影しているのではなからうか……。この推測は、ツアラトウストラ自身の次の言葉によって裏付けされる。

「……かつては私も、背後の世界を説くすべての者たちと同様に、

私の妄想を人間の彼岸へと馳せた。だが、本当に、人間の彼岸へであったのだろうか？ ああ、あなたがた兄弟たちよ、私が創作したこの神は、人間の作り物であり、人間の妄想観念であったのだ。すべての神々がそうであったように。この神は人間であった。しかも、人間と自我の貧弱なひとかけらにすぎなかった。私自身の灰と残り火から、それは出てきたのだ。この幽霊は。まことに。それは彼岸からやって来たのではなかった。それから何が起こったと思うか、私の兄弟たちよ？ 私は私を、この苦悩する者である私を克服した。私は私自身の灰を山に運び、そして私のもっと明るい炎を燃え上がらせた。すると、見よ。あの幽霊は、たちまち私から退散したのだ。……背後の世界を説く者たちに、私はこう言う。苦悩と不可能——それがすべての背後の世界を創作したのだ。それと、もっとも深く苦悩する者だけが経験するあのつかのまの幸福の妄想観念^④が。

ここでツァラトゥストラが、苦悩しその苦悩に耐える力のない人間の妄想が「背後の世界」と「神」をつくったのだと語るとき、彼は、山上に自己自身の「灰」を運んで行ったかつての自己、「苦悩する者」としての自己のことを考えるときにも、イエスその人や、バイブルにおいてイエスが愛したと記されている「神」、さらにイエスがそこから派遣されたと記されている「天」のことも同時に考えている。こうして、ツァラトゥストラによるイエス批評には、深く苦悩し、生の燃えかすである「灰」と化したかつての自己に対する現在の自己の側からの評価が混入することになるのである。この面にのみ注目するなら、ツァラトゥストラによるイエス批評も、その実質は、ツァラトゥストラの自己克服の意識であるということでも容易に説明がつく。しかし、それなら、なぜツァラトゥストラは、

かつての自己を「未熟」と語るにとどめないのか？ ——なぜ、とくにイエスの名を挙げイエス批評をおこなうのか？ ——

ともかく、ツァラトゥストラが、イエスに関するバイブルの記述とはまったくかわりなく、かつての自己にイエスという名を付してイエス批評をおこなっているにすぎないのであるとすれば、「ツァラトゥストラ」の思想の理解をめざす者にとって、ツァラトゥストラによるイエス批評の内容を、イエスに関するバイブルの記述とつき合わせる必要はないし、そのような作業はまとはずれて余計な作業だということになるだろう。つまり、本稿の前節での考察、すなわちツァラトゥストラによるイエス批評の内容は文字ど通りの意味においてバイブルの記述によって反駁されるということを示す考察——この考察ほど場ちがいなものはないということになるだろう。しかし、イエスに対するニーチェの優越意識の正当性を問うためには、イエスに関するバイブルの記述と、ニーチェがツァラトゥストラに語らせるイエス批評とのあいだに決定的な差、不一致があるということこそ決して看過されてはならない重要な一点なのである。バイブルを連想させる数多くの箇所をふくみもつ『ツァラトゥストラ』の著者ニーチェは、登場人物ツァラトゥストラに、イエスに関するバイブルの記述にまったく無知なままその記述とはまったくかわりのないイエス批評をおこなわせているわけではない。ニーチェは、イエスに関するバイブルの記述（この記述の理解において私はニーチェと別れるのだが^⑤）とツァラトゥストラによるイエス批評とのあいだの決定的な差、不一致を十分承知していると思われる。ニーチェは、バイブルに記されている（とニーチェ自身が理解する）イエスその人のことを念頭に置きながら、彼は「あまりにも早く死んだ」とか、「死への憧れ」におそわれたとか、「未熟」な

まま「人間と大地」を憎んだ「青年」であるとか、ツアラトウストラに語らせるのである。それゆえ、ツアラトウストラによるイエス批評の実質は、それはツアラトウストラの自己克服の意識であると言え、それで決着を見ろというような単純なものではない。

では、ニーチェは、バイブルに記されているイエスのどこに「未熟」さ、「人間と大地」への憎しみ、「死への憧れ」、等を認めるのであるのか? —— そのようにイエスを捉えるニーチェ自身の成熟はどこに認められるのか? —— このように問うことによつてのみ、イエスに対するニーチェの優越意識がはたして正当かどうかという問題を、われわれはさらに問い進めることができるのである。イエスに対するニーチェの優越意識の正当性を問うという問題は、ツアラトウストラによるイエス批評の内容が文字ど通りの意味においてバイブルに記されているイエスに適合するかどうかを検討すれば解決されるといった問題ではないし、また、イエスに関するバイブルの記述とツアラトウストラによるイエス批評とのあいだに決定的な差、不一致が見いだされたからといって、それら両者のいずれが（実在のイエス）（そのいわば復原が可能としてのことであるが）をより正確に捉えているかを（検証）（これが可能としてのことであるが）すれば解決されるといった問題でもない。ここでは今、バイブルに記されているイエスその人が問題視されているのである。すなわち、今その問題で問わなければならないのは、たとえ、イエスを、バイブルが語る意味で、身体をもつてこの大地に生きる人間への成熟した模範的な愛を實踐した人として、またこの地上で果たすべきものとして神から課せられた使命を完全に遂行した人として認めるにしても、なおかつそのイエスを、ツアラトウストラのように批評することが可能かどうかということ、可能とすればそれはど

のような意味において、またどのような思想にもとづいて可能であるのかということ、まさしくこのことなのである。それゆえ、イエスに対するニーチェの優越意識の正当性の有無を問い進めるために、われわれは今や、イエスとツアラトウストラを対決させてみなければならぬ。そしてその対決は、バイブルでイエスのものと記された知恵とツアラトウストラの知恵の頂点を形成する永遠回帰の思想を対決させることによつてはじめて徹底されるであろう。すでに本稿でも、われわれは、「超人」という言葉、「大地の意義」という言葉、「神は死んだ」という言葉、等に言及したが、これらの言葉にニーチェが託した意味の理解も、イエスとツアラトウストラを徹底的に対決させるといふ作業なしには決して深いものにはなるまい。バイブルに記されたイエスの知恵に無理解なまま、ましてや永遠回帰の思想に無理解なまま、ツアラトウストラによるイエス批評を鵜呑にする人は、イエスについてもニーチェについても、それゆえまたイエスに対するニーチェの優越意識についても何一つ理解できない。

バイブルに記されたイエスに対し、ニーチェは優越意識を抱いている。その理由は、イエスが「人間と大地」の意義の根源を、「人間と大地」を超越した神に見るからである。「人間と大地」の意義を神から付与されたものとして享受するか、その意義を超越神とはかわりのないものとして捉えるか、換言すれば、神が「人間と大地」を創造したのか、大地が人間を産出し、その人間が神を創作したのか、生物を産出する力を大地に与え、神を思考する力を人間に与えたのは、「人間と大地」を超越する神であるのか、……これらの問いを問い進めることにおいて、われわれは、われわれの中で、イエスとニーチェをますます激しく対決させることになる。そして、

われわれが、自己自身およびみずから身体をもって生活する場である大地の意義を問えば問うほど、われわれは、「人間と大地」の意義についてそれぞれ独自の思想をもつイエスとニーチェ、これら二人の知恵の深みに導かれてゆくのである。イエスの知恵とニーチェの知恵、これら二つの燃える「火」でわが身を精練しようと思ひ、その「火」の威力を経験する者にしてはじめて、イエスに対するニーチェの優越意識の正当性を問いつづけることができるのである。

注

- バイブルからの引用ならびにバイブルへの参照は、共同訳聖書実行委員会、「聖書 新共同訳——旧約聖書続編つき」日本聖書協会、一九八七年、による。当該箇所は、バイブルを構成する各書のうちの当該の書物の名称とその書物の章節を記し明示する。なお、引用に際し、いくつが表記(仮名と漢字)を改め、地の文との統一をはかった。
- (1) 『ツァラトゥストラ』を改め、地の文との統一をはかった。
「スーラ」の引用・参照は「Kröners Taschenausgabe Band 75, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1969 (Friedrich Nietzsche, Also sprach Zarathustra, 1883-1885)を用いる」の書物の頁数を「Zarathustra」の後に添えて当該箇所を示す。
- (2) vgl. Kröners Taschenausgabe Band 72, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1972, Erster Band, S. 305 (Friedrich Nietzsche, Menschliches Allzumenschliches, 1878-1880, Erster Band, §475). 参照箇所における「ニーチェはキリストを『もとも高貴な人間』と呼んでいる。」
Zarathustra, S. 78.
- (3) Zarathustra, S. 78.
- (4) 『ルカによる福音書』三〇の二三。
- (5) 『ヨハネによる福音書』は「イエスの宣教師期間内での三度の「超越祭」に言及している。『ヨハネによる福音書』二〇の二三、二三の二六、四一の五五、二二の二一、二三の二一」を参照せよ。
- (6) Zarathustra, S. 5.
- (7) 贈り与えることの「幸福」、愛することの「幸福」についてのニーチェの思考が、『ツァラトゥストラ』第一部所収の「贈り与える徳」

(Von der schenkenden Tugend) 第二部所収の「鏡をもった幼女子」(Das Kind mit dem Spiegel) や「夜の歌」(Das Nachlied)、第三部所収の「大いなる憧れ」(Von der großen Sehnsucht) 等の諸章に表現されている。そのような思考に際し、おそらくニーチェの念頭には、パウロがイエスの言葉として語る「受けるよりは与える方が幸いである」という言葉(『使徒言行録』二〇の三五)がある。なお、『箴言』一一の二五、も参照せよ。

- (8) 山を下ったツァラトゥストラが「民衆」に向かつてはじめて語る言葉が「私はあなたがたに超人を教えよう」(Zarathustra, S. 8)である。四度くり返されるこの言葉によって、最初の説教(Zarathustra, S. 8-10)が分節化されている。
- (9) Zarathustra, S. 9. 以下、「超人とは大地の意義である」とある。
- (10) Zarathustra, S. 84. 以下、「今やわれわれは、超人が生きんことを意欲する」とある。
- (11) vgl. Zarathustra, S. 11. 以下、「人間における偉大なところ、それは彼が橋であつて、目的ではないということだ。人間において愛されるところ、それは彼が移りゆきであり、没落であるということだ」とある。
- (12) vgl. Zarathustra, S. 8. 以下、「人間とは克服されるべき何物かである」とある。vgl. auch Zarathustra, S. 124-126.
- (13) vgl. Zarathustra, S. 9. 以下、「あなたがたの意志が、超人こそ大地の意義である」と言はんことを」とある。
- (14) Zarathustra, S. 11.
- (15) 『ペタイによる福音書』二二の三四-三六。
- (16) 『ペタイによる福音書』二二の三七-四〇。なお、『申命記』六の五、一〇の二一-二三、『エシマア記』二二の五、『レビ記』一九の二八、を参照せよ。
- (17) Zarathustra, S. 8. S. 9. vgl. Zarathustra, S. 84. vgl. auch Kröners Taschenausgabe Band 74, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1965, S. 140-141, S. 235-236 (Friedrich Nietzsche, Die frühele Wissenschaft, 1882, §125, 1887, §343). 他方、バイブルには「主を畏れることは知恵のはじめ」(『詩篇』一一の二〇、『箴言』一の七、九の二〇)と記されている。
- (18) 『イザヤ書』四〇の二八、「エフェソンの信徒への手紙」三の九、「へ

プライイ人への手紙』三〇四、『ヨハネの黙示録』四の二一、等を参照せよ。

(19) 『詩篇』一一三の四一六。

(20) 『イザヤ書』五三の二二、『マタイによる福音書』二六の二八、を参照せよ。

(21) Zarathustra, S. 9.

(22) Kröners Taschenausgabe Band 77, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1964, S. 340 (Friedrich Nietzsche, Ecce Homo, Warum ich so gute Bücher schreibe, §2). ニーチェは「私は……一個の世界史的な怪物である。——私は……アンチクリストである」と述べている。なお、『ヨハネの手紙 一』二の一八、二二、四の三、『ヨハネの手紙 一』七、を参照せよ。これらの箇所で、「アンチクリスト」に言及されている。

(23) 『ヨハネによる福音書』六の三八—四〇。

(24) 『コリントの信徒への手紙 一』一五の二二—二〇、を参照せよ。

(25) 『ヨハネによる福音書』一の二九。

(26) 『マタイによる福音書』七の二、『ガラテヤの信徒への手紙』五の六、『ヤコブの手紙』一の二—二五、二の一四—二〇、二六、を参照せよ。

(27) 『ヨハネによる福音書』一の三四。

(28) 『詩篇』三六の一〇。

(29) 『詩篇』一〇四の二九—三〇。

(30) 『創世記』二の七。

(31) 『使徒言行録』一七の二五、を参照せよ。ここに、「すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのには、この神だからです」とある。なお、『ヨブ記』三三の四、『イザヤ書』四二の五、等も参照せよ。

(32) プラトンには、『バイドン』七〇A—一〇七B、『バイドロス』二四五C—二四六A、等で、魂の不死性の論証を試みている。また、魂が「土の要素から成る身体」と結合し生物を形成するという思想が、『バイドロス』二四六B—C、二四八C—二五〇C、に表明されている。

(33) プラトン、『バイドン』六七D。なお、『バイドン』六四C、も参照せよ。

(34) 『聖書思想事典 VOCABULAIRE DE THEOLOGIE BIBLIQUE』三省堂、一九七三年、五五六—五五九頁（魂）の項、を参照せよ。

(35) 『申命記』三三の三九、に、「私の他に神はない。私は殺し、また生かす。私は傷つけ、またいやす。わが手を逃れうる者は、一人もない」とある。また、『サムエル記上』二の六、に、「主は命を絶ち、また命を与え、陰府に下し、また引き上げてくださる」とある。なお、『創世記』七の七—一四、も参照せよ。

(36) vgl. Kröners Taschenausgabe Band 77, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1964, S. 232 (Friedrich Nietzsche, Der Antichrist, §34), 参照箇所では「ニーチェは、『福音には自然死という概念がぜんぜんない』と述べている。この言葉は、その前後の記述に認められるニーチェのバイブル理解のコンテクストから切り離すことができるなら完全に正しい。

(37) 『詩篇』九〇の一〇。

(38) 『創世記』二の一五。

(39) 『創世記』二の一六一—一七。

(40) 『ヨハネの黙示録』一一の九、に、「この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者」とある。また、『ヨハネの黙示録』二〇の二、に、「悪魔でもサタンでもある、年を経たあの蛇、つまり竜」とある。

(41) 『創世記』三の一五。

(42) 『創世記』三の六。

(43) 『創世記』三の一九、二二—二四。なお、『ヤコブの手紙』一の一四—一五、を参照せよ。ここに、「人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれて、そのかさされて、誘惑におちいるのです。そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます」とある。

(44) 『イザヤ書』五五の一一、に、「私の口から出る私の言葉も、むなししくは、私のものにもどらない。それは私の望むことをなし遂げ、私が与えた使命を必ず果たす」とある。なお、『ヨシヤア記』二三の一—四、『イザヤ書』四六の一〇、『アモス書』三の七、『テトスへの手紙』一の二、等を参照せよ。

(45) 『創世記』三の五。なお、『創世記』三の二一、も参照せよ。

(46) 『創世記』二の九、三の二二、二四。なお、『箴言』三の三一—一八、一—の三〇、も参照せよ。

- (47) 『創世記』三の一七―二四。
 (48) 『ヨブ記』一四の一―五、に、「人は女から生まれ、人生は短く、苦しみは絶えない。花のように咲き出たは、しおれ、影のように移ろい、永らえることはない。……汚れたものから清いものを引き出すことができまじょうか。誰一人できなないので。人生はあなたが定められたとおり、月日の数もあなた次第」とある。なお、『創世記』五の三、も参照せよ。また、『ヨシヤア記』二三の一―四、で、死期の近づいたヨシヤアが、「私は今、この世のすべての者がたどるべき道を行こうとしている」と語っている。なお、『列王記上』二の一―二、も参照せよ。
 (49) 『ローマの信徒への手紙』五の二―二。
 (50) 『箴言』一四の二―二、一六の二五、を参照せよ。
 (51) 『ローマの信徒への手紙』三の一〇―一八、を参照せよ。ここに、「正しい者はいない。一人もない。悟る者もなく神を探し求める者もない。皆迷い、……善をおこなう者はいない。ただの一人もない。……彼らは舌で人を欺き、……口は、呪いと苦味で満ち、足は血を流すのに速く、その道には破壊と悲惨がある。彼らは平和の道を知らない。彼らの目には神への畏れがない」とある。
 (52) 『マタイによる福音書』二四の一―二五の四六、『マルコによる福音書』一三の一―三七、『ルカによる福音書』二二の五―三六、『テモテへの手紙』二―三の一―四の八、を参照せよ。また、『ダニエル書』一一の一―三、『ペトロの手紙』一―四の七―一、『ヨハネの手紙』一―二の一―二五、等も参照せよ。
 (53) 人間は神への服従なしに自己を治めることができないうというのがバイブルの思想である。『エレミヤ書』一〇の二三、に、「人はその道を定めえず、歩みながら、足取りを確かめることもできません」とある。

- (54) 『創世記』二の九。
 (55) 『創世記』一の二八。
 (56) 『エレミヤ書』三の二二、『エゼキエル書』一八の三〇―三三、三三の一〇―一一、『マラキ書』三の七、等を参照せよ。
 (57) 『詩篇』四九の一三―一六。
 (58) 『詩篇』一三〇の七―八。
 (59) 『創世記』一八の一―四、『マタイによる福音書』一九の二六、『ルカによる福音書』一の三七、等を参照せよ。
 (60) 『イザヤ書』五九の一―二。また、『イザヤ書』二九の一三、『マタイによる福音書』七の二二―二三、一五の一―九、も参照せよ。
 (61) 『ヨハネの手紙』一―五の三、に、「神を愛するとは、神の掟を守ることです」とある。
 (62) 『詩篇』五一の一―一四。
 (63) 『哀歌』五の二―二。
 (64) 『イザヤ書』二五の八。救済の実現した状態や神による祝福のゆきわたった状態について、たびたびバイブルは記している。「命の木」への道がふたたび開かれ（『ヨハネの黙示録』二の七、二二の二、一四、「悪魔」すなわち「サタン」が滅ぼされ（『ヨハネの黙示録』二〇の二三、一〇）、人々が「永遠の命」を享受し（『ダニエル書』一二の二）、諸民族のあいだに平和と調和が支配し（『イザヤ書』二二の四、『ミカ書』四の一―四）、大地は祝福され豊かに花を咲かせ実を結び（『イザヤ書』三五の一―二、『ホセア書』二の二三―二四、『ヨエル書』四の一七―一八、『アモス書』九の一三）、もはや悲しみも嘆きも死さえもなく人々は喜び踊る（『イザヤ書』二九の一八―一九、三五の五―六、一〇、五一の一―三、一一、六五の一七―二五、『エレミヤ書』三一の一〇―一四、『コリントの信徒への手紙』一―一五の二六、『ヨハネの黙示録』二〇の一四、二二の三―四）、等々。
 (65) 『イザヤ書』四三の二五、に、神の言葉として次のように記されている。「私、この私は、私自身のためにあなたの背きの罪をぬぐい、あなたの罪を思い出さないことにする」。
 (66) 身代わりは人間でなければならぬ。動物は、人間の罪を贖うための献げ物としては不十分である（『ヘブライ人への手紙』一〇の一―四、一一、を参照せよ。参照箇所には、「雄牛や雄山羊の血は、罪を取り除くことができず」と記されている。さらに、それは罪のない完全な人間でなければならぬ。人間を「永遠の命」へと解放するために支払わなければならない身代金は、「永遠の命」のような資格のある人間の血、すなわち「さすや汚れない小羊」のような人間の「血」（『ペトロの手紙』一―一の一九、を参照せよ）でなければ不足する（なお、神への献げ物は完全なものでなければならぬという思想が、『出エジプト記』一二の五、『レビ記』二二の一―八―二五、『申命記』一五の二二、一七の一、『マラキ書』一の七―八、

一二一—四、等に表明されている)。しかし、人間がすべてアダムの子孫であり、アダムに型どられていたならば、一体誰が不足のない身代金を支払うことができるだろうか。死すべき人間の中の誰かが、人間への愛に満ちあふれた誰か英雄的な人物が、その命を身代金として神にささげても、それは、死すべき他の人間たちを「永遠の命」へと解放するには十分でない。このような意味での自力救済の不可可能性について、『詩篇』四九の六—一〇、では、次のように記されている。「災いのふりかかる日、私を追う者の悪意に囲まれるときにも、どうして恐れることがあろうか、財宝を頼みとし、富の力を誇る者を。神に対して、人は兄弟をも贖いえない。神に身代金を払うことはできない。魂を贖う値は高く、とこしえに、払い終えることはない。人は永遠に生きようか。墓穴を見ずにすむであろうか。」

(67) 『イザヤ書』五三の二—二二。

(68) 『ペトロの手紙』一—一九。

(69) 『コリントの信徒への手紙』一—一五の二—二二、に、「死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです」とある。なお、『ヨハネによる福音書』一二の二四、等も参照せよ。

(70) 『テモテへの手紙』一—二の五、に、「神と人とのあいだの仲介者」はただ一人、「人であるキリスト・イエス」のみと記されている。マリアは「神と人とのあいだの仲介者」ではない。また、『ヨハネによる福音書』一四の六、には、「私は道であり、真理であり、命である。私を通らなければ、誰も父のもとに行くことはできない」というイエスの言葉が記されている。

(71) 『ルカによる福音書』一—三五。

(72) 『ヨハネによる福音書』三の一六、に、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」とある。また、『ローマの信徒への手紙』八の三二、で、パウロは神を、「私たちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方」と述べている。

(73) 『ローマの信徒への手紙』三の三—二六、五の一—一九、六の二—三、『コリントの信徒への手紙』一—一五の二—三、『コリントの信徒への手紙』二—五の二—三、『テトスへの手紙』二の一—四、等を参照

せよ。

(74) 死を目前に控えたイエスは、神への祈りの中で次のように述べている。「私は、おこなうようにとあなたが与えてくださった業をなし遂げて、地上であなただけの栄光を現わしました」(『ヨハネによる福音書』一七の四)。と。とはいえ、バイブルによると、イエスの表現する神の「栄光」に盲目な人が多い(『マタイによる福音書』二七の二七—三〇、三九—四四、等を参照せよ)。自分の知恵を誇り自分の力を頼む者は、イエスの死に、イエス個人の「愚かさ」と「弱さ」しか認めないからである。彼らを念頭に置いて、パウロは、『コリントの信徒への手紙』一—二五、で、「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」と述べ、また同書三の一八、では、信仰の兄弟たちに向かつて、「誰も自分を欺いてはなりません。もし、あなたがたの誰かが、自分はこの世で知恵のある者だと考えているならば、本当に知恵のある者となるために愚かな者になりなさい」と忠告する。さらに、パウロは、イエスが表現する「福音の光」を見えなくする力、すなわち「光の天使」を装う「サタン」の力について語っている……。「この世の神が、信じようとはしないこの人々の心を目をくらまし、神の似姿であるキリストの栄光に関する福音の光が見えないようにしたので」(『コリントの信徒への手紙』一—四の四、一—一四)、と。なお、『箴言』二六の二二、『ヨハネによる福音書』九の一—四一(とくに三九—四一)、『コリントの信徒への手紙』一—一八—三二、二の六一—六三、三の一八—二二、も参照せよ。

(75) 『詩篇』三七の九、一一。

(76) 『箴言』二の二—二二。

(77) 『マタイによる福音書』六の一〇。

(78) 『ヨハネによる福音書』一一の三一、一四の三〇、一六の一。

(79) 『コリントの信徒への手紙』二—四の四。

(80) 『マタイによる福音書』四の八一—一、ルカによる福音書』四の五一—七。また、『ヨハネの手紙』一—五の一九、に、「この世全体が悪い者の支配下にある」とある。

(81) 『ヨハネの黙示録』二二の一、三一—四。また、『イザヤ書』六五の一七、『ペトロの手紙』二—三の二三、も参照せよ。これらの箇所、「新しい地」に言及されている。

(82) 『創世記』一—三一。

- (83) 「一時的」とはいえ、今なお、「悪人の歴史」、「罪人の歴史」がづいている。そこから、神の約束、人間を救済するという約束はどうなったのかという疑問が生じる。「神の国」は期待して待つて得られるようなものではない。そこには昨日も明後日もない。「千年」たっても来るものではない。——「神の国」は心における一つの経験である」(Kroners Taschenausgabe Band 77, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1964, S. 232 (Friedrich Nietzsche, Der Antichrist, §34))とニーチェは解釈した。同種の疑問が、『ペトロの手紙 二』三の三四、に記されている。「終わりの時には、欲望の赴くままに生活してあざける者たちが現れ、あざけって、こう言います。『主が来るという約束は、いったいどうなったのだ。父たちが死んでこのかた、世の中の話は、天地創造のはじめから何一つ変わらなではないか。』この種の疑問に關し、ペトロは、同書三の八一—〇、で、次のように語っている。「愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるではありません。そうではなくて、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。主の日は盗人のようにやってくる。なお、『ヨナ書』を参照せよ。神の忍耐について人間がおちいりやすい誤解と、神の忍耐とはどのようなものであるかを、巧みに描出する書物である。
- (84) Zarathustra, S. 76.
- (85) *ibid.*
- (86) *ibid.* ツァラトゥストラの言葉「勝利に輝き」(Siegreich)は、問近に迫った死を意識するイエスが弟子たちをばげます言葉、「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私はすでに世に勝っている」(『ヨハネによる福音書』一六の三三)を連想させる。
- (87) Zarathustra, S. 76. ツァラトゥストラの言葉「棘」(Stachel)は、三度イエスを否認してイエスに対する自分の愛の浅さを思い知り「激しく泣いた」ペトロの痛みを連想させる。『マタイによる福音書』二六の三一—七五、を参照せよ。
- (88) Zarathustra, S. 76.
- (89) *ibid.*
- (90) Zarathustra, S. 76, S. 77.
- (91) Zarathustra, S. 75.
- (92) 『マタイによる福音書』二六の三九。
- (93) 『マタイによる福音書』二六の三八。
- (94) 『マタイによる福音書』二六の四二。
- (95) この大地、この世界、およびそれに所属するものとしての身体に対する憎しみ、嫌悪は、プラトニズムの一大特色である。プラトニズムから、身体への軽蔑、身体的欲望を抑圧すること(禁欲主義)、この世界およびこの世界に所属するものとしての身体からの脱出願望、等が生じるが、これらの局面に即して判断するかぎり、バイブルの思想は反プラトニズムの思想である。イエスは、その弟子たちのごとで神に祈り、「私がお願ひすることは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです」(『ヨハネによる福音書』一七の一五)と述べている。また、パウロは、『コロサイの信徒への手紙』二の二〇—二三、や、『テモテへの手紙』一四の一—五、において、「何の価値もない」「独り善がりの礼拝」、「偽りの謙遜」、「偽善」として、「体の苦行」や「結婚を禁じたり、ある種の食物を断つこと」を挙げている。さらにパウロは「神がお造りになられたものはすべて良いものであり、感謝して受けるならば、何一つ捨てるものはない」(『テモテへの手紙』一四の四)と言う。この世が「悪魔」の支配下にあるかぎり、この世にとどまりつつもこの世のものとはならずこの世およびその支配者と戦いつづけるという生活が、バイブルの勤める生活である。『ヨハネによる福音書』一五の一八一—九、一七の二六、「エフェソの信徒への手紙」六の一〇—一八、「ヤコブの手紙」四の四、「ヨハネの手紙 一」二の二五—二七、五の三一—五、等を参照せよ。
- (96) 『ヨハネによる福音書』一〇の一八、に、「誰も私から命を奪い取ることはできない。私は自分でそれを捨てる」というイエスの言葉が記されている。vgl. Zarathustra, S. 77. 参照箇所、ツァラトゥストラは、「私の死を、私はあなたがたに向かつてほめたたえよう。自由な死を。それは、私が意欲するがゆえに、私のもとに来る死である」と語っている。
- (97) Zarathustra, S. 75.
- (98) Zarathustra, S. 6.
- (99) *ibid.*

(100) 「ルカによる福音書」二二の四九、に、「私が来たのは、地上に火を投ずるためである」というイエスの言葉が記されている。ニーチェは、地上に「火」を投ずるイエスの姿を、谷に「火」を運ぶツアラトウストラと重ね合わせている。しかしそれでも、ニーチェは、ツアラトウストラのイエス批評に際しては、燃える「火」をたずさえた現在のツアラトウストラではなく、「灰」をたずさえ山に入って行ったかつてのツアラトウストラをイエスに重ね合わせている。ニーチェは、イエスに関する様々な記述をバイブルから借用し、ツアラトウストラという人物とその思想の創作に役立て、このツアラトウストラにイエス批評をおこなわせる。

(101) Zarathustra, S. 31.

(102) ニーチェがイエスに関するバイブルの記述を（熟知）していることは疑いない。しかし、彼のバイブル理解は、私が本稿で要約した私のバイブル理解とは少し（極めて重大な少しであるが）異なっている。その相違の概略を記しておこう。ニーチェはバイブルの思想を「キリスト教」として理解している。ところが、ニーチェによれば、「キリスト教は『民衆』向きのプラトニズムである」（Kroners Taschenausgabe Band 76, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1976, S. 4-5 (Friedrich Nietzsche, *Jenseits von Gut und Böse*, 1886: Vorrede.)）。それゆえ、ニーチェは、バイブルの思想をプラトニズムの一種として理解している。しかし、本稿は、バイブルの思想とプラトニズムを根本的に異質のものとして捉えている。注(32)(33)(34)そして(95)、ならびにこれらの注を付した本稿本文の箇所を参照せよ。ニーチェの「キリスト教」批判を読むとき、私は、その批判がプラトニズムに対する批判としては妥当であり、それゆえプラトニズムを引き込むかぎりでの「キリスト教」に対する批判としても妥当であると認めることができるにしても、バイブルの思想、あるいはイエスの知恵、あるいは「あなたの御言葉は、私の道の光、私の歩みを照らす灯」（『詩篇』一一九の一〇五）と神に向かつて語る人々の知恵に対する批判としてはまとはずれではないかとの印象をしばしば抱くことがある。この点については、いずれ稿をあらためて詳しく論じた。

(103) 『創世記』一の一〇二の一。

(104) 先の引用箇所——注(101)——を参照せよ。vgl. auch Kroners

Taschenausgabe Band 77, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1964, S. 81 (Friedrich Nietzsche, *Götzen-Dämmerung*, 1889, *Sprüche und Pfeile*, 7)。「箴言と矢 七」は以下のとおり。「何だって？ 人間は神の一つの失策にすぎないって？ それとも、神が人間の一つの失策にすぎないのでは？ ——」。

(105) 『イザヤ書』二九の一六、を参照せよ。

(106) vgl. Kroners Taschenausgabe Band 76, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1976, S. 194 (Friedrich Nietzsche, *Jenseits von Gut und Böse*, 1886, §256) 参照箇所でニーチェは「アンチクリストの哲学」の究めがたい深みと根源性を誇っている。